

ホトトギス

昭和十四年五月二十一日発行 第四百二十四号 第五号

ホトトギス

五月号



風雅の小笛「四十」

廣太郎

知る人ぞ知る、というより結構広まっているようだが、私の一番の趣味はクラシック音楽である。五歳の時からピアノを個人教師にかれこれ十年位習っており、中学生から音楽鑑賞にのめり込んで行った。無謀にも本気で指揮者になりたかった時代もあり、実は虚子の次男である池内友次郎に東京芸大に入学したい旨を打診して一笑に付された事もある。結局現在はピアノを弾くにも指が全く反応しなくなり、もっぱら鑑賞するのみとなっている。新型コロナウイルス蔓延の影響でライブ演奏は行けなくなってきたが、ホトトギス社の地方大会等が中止になったり、部内の小規模の句会も自粛される中、土日の休みが増え、夕方も帰宅が早くなり〇〇やネット配信等の媒体で音楽を聴く機会が増えており、趣味を堪能している。

音楽は所謂「再現芸術」という事で、先ず作曲家は基本的に楽譜の形で作品を完成させるが、鑑賞者は、実際その楽譜を演奏するか、他の音楽家等の媒体の演奏を聴いて初めて芸術として完成される。

こじつけかも知れないが、俳句も、例えば俳句を作って、俳句会で投じて、披露でその句が読み上げられてそこで一つの作品として完成されるといふ点においては再現芸術の要素を満たしているだろう。俳句は文字として残す事も勿論出来、色紙や短冊に挿毫すると、こちらは絵画的な性格を帯びてくる。そして面白いところは、その俳句作品を鑑賞する人は、俳句の短さも相俟って様々な解釈が成り立つのである。そんな多方面の楽しみ方をこれからも追求して行きたい。

旬日記 汀子

令和二年五月三日 下萌旬会

若葉萌え人々鎮めをりし日々
一枚を脱ぎて即ち更衣
祭さへ肅清といふ日々となる
昨日より今日やや曇り若葉冷
常の日々いつ戻るとも若葉冷

五月八日 工業倶楽部

薔薇咲いて散りて歳月またたく間
しばらくは薔薇に家居を楽しまむ
この時期は忽ち過ぎてゆく薄暑
慣れてゆく薄暑の日々の過ぎ易く

五月十二日 大阪倶楽部

牡丹の今年の白の汚れなし
更衣してたちまちに旅心
五月十九日 有恒俳句会
遙かより祭囃子の帰路となる

何となく息深く吸ふ薄暑かな

五月二十日 時雨旬会

息深く薄暑の空気胸に満つ
祭まで中止となりぬ疫病に
家居して何も進まぬ薄暑かな
出掛け来し薄暑の風を身に纏ふ
富士見えて着陸近し旅薄暑

牡丹の崩れし名残ありにけり
風向の変りて祭囃子かな
崩れんとして牡丹の威なほ失せず
遠ければ遠きまなざし祭笛

五月二十日 夏潮旬会

五月二十二日 アネモネ旬会

草笛を吹きつつ帰る夕べかな
一人づつ吹きて草笛なりしかな
草笛や一人が吹けば又一人
草笛に器用不器用言ふ勿れ
旅に見て覚えて忘れ山法師
咲いてゐる旅の印象山法師

世の中の騒ぎあれこれ夏に入る
薫風に誘はれし如出掛け来し
薫風の中に身を置き初めにけり
薔薇の香に集ふ日は何時心待ち
集ひたき仲間涼しき灯の下に
消息を問へば応へて薫風に

電話とは近くて遠し山法師

咲き終へし牡丹に名残ありにけり

無名会 出句

更衣しても貧しき心かな
又一人客をもてなす新茶淹れ
忙しいことが身に添ふ更衣

地に下ろしたる牡丹の咲きそめし
考へのだうだう巡り明易し
上京を終へ牡丹に降り立ちぬ
時間あるやうでなかりし明易し

廣太郎旬帳

廣太郎

令和二年五月三日 野分会音屋例会

鳥賊火燃ゆ日本海を帆ませて
ラベンダー蝦夷の大地を目覚めさせ
紫の風は饒舌ラベンダー

五月七日 蕉心会通信句会

みどりの日憂ひの色を置く並木
清貧の風を求めて柳絮とぶ
桜葉降る音首都の黙を解き
渋滞といふ言の葉の失せ立夏
卯浪寄す空路海路の閉ざされて

五月十四日 十筆会不在投句

その中に魔物を秘めて若葉風
一畝に筍現るる刹那かな
里若葉生家遠退くばかりかな

五月十四日 北國文芸選者吟

若葉風ゴーストタウンめく都心
五月十五日 廣邦会

花水木十年振りに咲く我が家
薔薇の香を愛でつつ疫を恐れけり
句友てふ心の絆花は葉に

五月二十一日 前議員句会

人絶えし都心の静寂花は葉に
筍を掘りて朝日を引き寄せし
現世を震撼させて夏来る

五月二十四日 野分会東京例会リモート句会

鳥賊釣火たましひの色染め上げて
ラベンダー地球青から紫へ
鳥賊火燃ゆ水平線を曖昧に
寝惜しみて鳥賊火の燃ゆる窓辺かな

五月二十六日 若水句会不在投句

更衣迷うて一ト日暮れにけり
祭皆中止延期となる憂ひ
咲く気品崩るる気品白牡丹

雑詠 廣太郎 選

けらけらと笑へる独楽となりにけり 津 中杉隆世
 酔ひどれの天使のごとく独楽笑ふ 同
 独楽つひに笑ひ転げて眠りけり 同
 大綿も庭の花鳥として飛べる 徳島 岩田公次
 空へ声かけて餌を撒き鶴を待つ 同
 湖渡り旅立つ神に虹の橋 同
 鳥獣の星座組み上げ山眠る 神戸 山田佳乃
 肩先に沿うて柚湯の香の動く 同
 開拓の昔話を聞くペチカ 同
 クリスマスイブ懺悔室閉ぢてをり 同 和田華凜
 星冴ゆるこの地に祈りマリア像 同
 聖夜劇台詞忘れし子の涙 同
 楽聖の墓碑を慰む冬薔薇 同 涌羅由美
 冬の月深海色の闇照らし 同
 鼻歌が短調となる小夜時雨 同
 灯が灯呼ぶごと短日の家並かな 香川 湯川 雅
 捨石や凍蝶の魂ふと揺らぐ 同
 影抱いて狸々木の燃えしぶる 同

初雪と夫振向けば誰もぬず 同 三宅久美子
 風花や心やうやく泣く余裕 同
 こんなにも緩き涙腺冬薔薇 同
 蒼穹に太陽のある寒さかな 高崎 清水舞子
 冷えし身を裏返しては日向ぼこ 同
 オリオンに逢うて湯ざめをしてしまふ 同
 てのひらに小春のこゑをあふれしむ 熊本 岩岡中正
 ふるさとはいつもしぐれてゐるやうな 同
 旅果てのごと木枯を聞いてをり 同
 星硬き光放ちてクリスマス 龍ヶ崎 今橋真理子
 街の灯へこぼれかかりて星凍つる 同
 冬帝や天上に星従へて 同
 西空やまどかに残る去年の月 東京 田丸千種
 風花や山眠つたり遊んだり 同
 初笑口角の籬ふつとばし 同
 貴婦人は貴婦人らしき噓かな 神戸 塚本武州
 始まりはアダムとイブのくさめかな 同
 生きてゐる証となるや大噓 同
 ビル街の空は四角に冬めける 加須 岡安紀元
 長あくび出るほど小春日和かな 同
 梳るたびに哀しき木の葉髪 同
 秋の灯に笑顔はじけて癒えられし 相模原 木村享史
 旅出来ぬ地球となりぬいわし雲 同
 口角に沫は禁止ぞおでん酒 同

雑詠句評（四月号より）

空低く来る洛北の時雨雲 長岡 安原 葉

令和てふ元号親し去年今年 東京 今井千鶴子

京都でも特に洛北あたりは時雨がちである。北山の向こうの日
本海側からくる雲は重たそうな暗い色をしていて、段々と寒さが
近づいてくるような気配を感じさせる。

そんな雲の低さ、暗さも洛北の風景を洛北らしく感じさせるも
のなのだろう。（佳乃）

時雨といえば、京都が最も似合う景のひとつである。そんな時
雨の風情を感じておられる作者である。時雨は、長い時間降って
いるというものではなく、時雨雲の去来で短時間雨を降らせた
と思ったらもう晴れて、降っている間遠景は晴れていたりする。そ
んな雲の動きを的確に捉えている。（廣太郎）

作者は昭和三年生まれの高濱虚子を知る数少ない方たちの一人
である。今井つる女の長女とし生まれ、虚子の口述筆記を行って
いたりもした。

作者の年齢からみれば、俳人として昭和から平成時代が最も活
躍した頃なのであろう。特に令和という元号に親しみを抱いたの
は、失礼ながらご自身の年齢が気になっていたのではあろうか。

令和に入ってからコロナウイルスの蔓延等により、未だ必ず
しも良き時代とは言えないのであるが、虚子の「去年今年貫く棒
の如きもの」の句のような時代の移り変わり、時の流れをしみじみ
と感じているのであろう。（紀元）

平成から令和への改元は、それまでの天皇が御隠れになられた
のではなく、上皇として御健在であり、めでたさも一入であった
事を思い出す。この号の出るのは令和三年の四月末頃であり、我
もすっかり親しんでこの元号の中過している。多難な時代では
あるが、希望を持つ作者なのである。（廣太郎）

天地有情

江戸子選

晴れし旅富士見えずとも冬ぬくし
 快晴の旅にも吹雪く閑ヶ原
 水中花にも枯れ色といふ矜持
 ロザリオの玄義に揺るる水中花
 いつ終るこの憂鬱な寒き日々
 立子師を囲みぬし頃小正月
 誉められてゐるマフラーは娘の手編み
 浅漬や妻は亡くとも娘が居りて
 椿子の面影残る納句座
 俳磚の故人を偲ぶ納句座
 子規虚子の好みし愛宕柿素朴
 ほとんどが団栗のみで果つ命
 木枯といへばみちのく思ひけり
 時雨好き時雨過ぎたるあとがすき
 月まどか大つごもりの街照らし
 まだ暗き朝の厨になづな打つ
 富士抱きつつ小春日となりにけり
 大いなる日溜り富士の小六月

長岡 安原 葉
 同
 東京 稲畑廣太郎
 同
 同 今井千鶴子
 同
 相模原 木村享史
 同
 宇治 西村やすし
 同
 八尾 山下美典
 同
 熊本 岩岡中正
 同
 東京 山田閨子
 同
 静岡 須藤常央
 同

すつぼりと落葉の包む庭の黙
 大櫻見上げて踏んで行く落葉
 元朝の金波銀波を借景に
 肅肅と海広げゆく初景色
 おめでたをほのめかしある初便
 恒例の稽古始の四海波
 行年やベートーヴェンの曲が好き
 林檎むく締切迄は十五分
 やあしばらく声が焚火の向かうより
 さよならの声のとどきし冬木立
 遠吠の犬の応へる虎落笛
 野に摘みし数珠玉つなぐ置ごたつ
 初富士や遙か茜に染まりをり
 初富士や寄添ひてをり茜雲
 古都にゐる思ひしぐるる気配して
 蘇るあの日引き寄せ寒の月
 初雀声より庭に降りてくる
 凧の夜をシリウスの光り澄む

芦屋 黒川悦子
 同
 神戸 和田華凜
 同
 同 三村純也
 同
 鎌倉 星野 椿
 同
 神戸 浜崎素粒子
 同
 東京 笹倉 潤
 同
 同 河野昭彦
 同
 宝塚 水田むつみ
 同
 龍ヶ崎 今橋真理子
 同